

樺 太

わが引揚げの記録

北海道 佐藤晴夫

長年、故郷として生活してきた樺太蘭泊村ともお別れする日がきた。私は、戦前蘭泊村役場庶務係主任として、戦時体制下の行政遂行の一端を担ってきたが、終戦によりソ連進駐後も村役場にあり、住民の不安除去に努め、更にソ連民政局の地方機関として、設置された蘭泊民政署に、役場行政が接収されたのちも在籍し、常にソ連行政と日本住民とのパイプ役として働いてきたのであった。

昭和二十二年八月二十三日の朝、引き揚げるべく、

世話になった民政署長マリチアノフ（当時陸軍中尉）や秘書のルサコワタマラさんほか関係者にあいさつ、マリチアノフから「佐藤さんいろいろ協力してくれてありがとう。またサハリンに帰ってこいよ」とねぎらいの声にこたえての固い握手での別れであった。

四月から、マリチアノフの命令で、約五カ月近く同村富内岸沢部落会長をしていた関係から、同地区の農事実行組合長佐藤菊治氏（引き揚げ後、旭川市在住）のご好意によって、馬車に行李や荷物を三個ほどと、各自の身の回り品だけが精いっぱい携行品を乗せての引揚げであった。それに私を含め家族七人を搭乗させてもらい、真岡町にある引揚者収容所に向かった。家族は私夫婦と三歳の長男それにこの春生まれたばかりの次男と子供は二人、ほかに私の母、妹、弟の七人

であつた。わが家を出発するとき、当時、わが家に同居していた同級生の泉佐一郎君家族（あとで引き揚げ、北見市在住）が、見送つてくれた。

住み慣れたわが家や友人の姿が見えなくなり、故郷蘭泊が遠のいて行くにしたがい、この地で亡くなつた父（一部分骨を携行した）や弟の霊を置いて去るのは、断腸の思い、更には少年時代から、この地で育まれてきた数々の思い出が、走馬灯のように脳裏に蘇つてくるのであつた。

○かに缶拾いをしたこと。

○馬糞みちを浜で買った大きなたらば蟹を、子どもの力でやつと引きずつて帰つたこと。

○平磯のつづく海の浅瀬で海胆や、毛蟹を存分に手で捕つたこと。

○小学校下校時に大吹雪に遭い、吹きだまりに倒れ、通りがかりの人に救助されたこと。

○春の鯀場の最盛期のことや、鯀の群来（くき）のとき、たもと称する手綱でいくらでもすくつたこと。

○冬山造材期になると、伐り出した丸太を運搬するバチバチと称する馬櫓が、何十台も市街地を縫つて製材工場の土場に続いていたこと。

などなど……。 「かに缶拾い」というのは、私の子供のころ、家から約五百メートルほど離れたところに、たらば蟹を原料とした缶詰工場があつて、女工を数十人も抱え、部落としては大きな工場であつた。私たちはよく工場の窓から作業場をのぞくことがあつたが、缶詰の材料はたらば蟹の雄で、その足の太股の部分だけを缶詰にしているようで、ほかの部分は一部二次加工に回すほか、ほとんど投棄していた。すべて現在のようにオートメーションというわけにはいかず、女工さんが缶に詰め込むまでは手作業で、あとの缶詰とか加熱殺菌、脱気検査は機械によるようであつた。検査は、ねとなつた缶詰は日時が経つと腐敗し、缶蓋が膨脹するのですぐそれと分かつた。投棄するのを待ち構えていた子どもたちは、おもいおもいに手籠や手櫓などを用意してきていて、新鮮な缶詰だけを競つて拾い分けるのであつた。「かに缶拾い」は、時によつて十個

も二十個も拾えることができたが、今のようには冷蔵庫などあるわけもなく保存管理ができないので、たくさん持ち帰っても、品がいたまないうちに急いで食べてしまわねばならないから、欲張って拾う必要もなく、食べたくなったらまた、拾いにいくということの繰り返しであった。現在は「かに缶」というと一個千円以上もして、容易に庶民の口にしにくい時代になった。いまにして思えば夢のような話であるが、ともあれ、当時の樺太はよき時代であり、恵まれた自然や環境の中で育ったわけで、いま父の築きあげた有形無形の財産を放棄して、裸同然の一家が、いろいろな思いを抱きながら、引揚者収容所に向かったのである。

引揚者収容所は、真岡町の高台にある旧樺太庁立真岡高等女学校の校舎を改造したもののようであった。収容所の人口まで私どもを運んでくれた佐藤菊治氏には有り難く、ひたすら感謝の意を表し、お互い元気での再会を約し、別れたものであった。

収容所の前庭には、引揚者とその荷物で足の踏み場もない混雑であった。やがて教室が集会所のようなど

ころに集められ、そこから廊下を隔てて収容所に入る前、パスポートのチェックと携行荷物の点検が行われた。私の行李の中には、ソ連支配下における新聞「新生命」やソ連発行の雑誌、ソ連紙幣、ソ連人と一緒の写真、私の生いたちの写真や記録、村役場の貴重な資料など、将来のためにと隠し持ってきて、行李の油紙の下にひそませてあり、表面は衣類とか日常生活品のたぐいのように見せかけてあったので、もし念入りに調べられたら、との不安を抱きながら臨検であった。

検査官は二、三人いて、その一人が「佐藤さん、しばらく」と呼ぶのである。びつくりして見直すと、かつて私の四、五軒離れたところに住んでいて、通訳もしていたソ連女性で、私の民政署勤務時代に、いろいろとかかわりがあったのである。私も「しばらくでした。ここにお勤めでしたか」と言葉返すと、荷物の表面をいじっただけで「ハラシヨ・ブイストラ（よえろしい。早く行きなさい）」というのである。「スパシーボ（ありがとう）お元気だね」と頭を下げると、何回もうなずいてくれた。私は、あいさつもそこそこに

妹や弟を促し、荷物を先送りしたのであった。内心ホッとしたのは言うまでもないことであつた。

収容所は、教室であつたところを更に二つに仕切り、更に壁に沿ひベッドが二段に組まれており、一室には約百人ぐらい収容できる。そして、この収容所にはソ連側の意志を伝え、引揚者と連絡調整するため、旧軍人捕虜らしい人が、何かと世話をしていたようであつた。その責任者(将校)の指導で、この収容所に入つた真岡、蘭泊、小能登呂、落合、留多加からの引揚者一、五三〇人をもつて、第二大隊が編制されることになつた。あとで聞いたところによると、四大隊が編制され、引揚船の入港順序に従ひ、第一大隊から大隊ごとに逐次乗船する計画とのことであつた。

第二大隊長には真岡出身の桜井逸平氏が選出され、副隊長には真岡、蘭泊と小能登呂は合体、落合、留多加の四つが各ブロックから、一人ずつ選出することになり、また収容所生活の自治組織として、それぞれの分担部署の責任者が次のように決められたのであつた。

大隊長 桜井逸平(真岡)

副隊長 宇野賢二(〃)

〃 佐藤春夫(蘭泊)

〃 花野倉司(落合)

〃 射羽完二郎(留多加)

児童体育班長 武田貞子(蘭泊)

炊事班長 藤島 茂(真岡)

衛生班長 桧森 誠(〃)

清掃班長 飯山泰治(〃)

作業班長 菅原 宏(落合)

演芸係 石井正光(〃)

私は、私の所轄する蘭泊村の引揚者二八一人、小能登呂村引揚者約百人を四班に分け、第二十一班一〇一人の班長に熊木文夫氏、第二十二班一〇三人の班長に新山己之策氏、第二十三班七七人の班長に和田豊三郎氏を、第二十四班となる小能登呂班の班長はそちらの自主性にゆだねたのであつた。このように大隊長、副隊長及び班長は、それぞれ所轄する引揚者の多方面にわたる相談相手と、その把握に努め、各部署の班長は班を編制し、部署活動を活発に行うなど、乗船する九

月四日まで続いた。

この収容所生活の中で問題は共同便所であった。この共同便所は、便槽が大きく掘られていて深さは三メートル以上もあるうか。便室は個室でなく、一応皮板と称せられる製材のはね材で仕切つてはいるが、オーブンといつても過言でなく、殊に婦女子は嫌がついてたようであった。子どもたちも気味悪がつて、収容所の周囲で用を足す者も少なくなき悪臭が漂い、衛生班、清掃班は閉口していたようであった。

あるときこんな事件が起きた。

「隊長さん方きてください。私の大事な荷物がいつの間にか、他人の荷札に変わっているんです」

それは、引揚者の携行荷物を集積してある屋根だけの倉庫に、たまたま本人が荷物を確かめに赴いたところ、自分の荷物にいつの間にか、他人の荷札に変わつていてというのである。私と班長が立ち会い、念のため「あなたの荷物の中味は何か」と糺してみると、これこれであるという。更に新しい荷札となっている本人も呼び糺したところ、私は知らないと言う。そこで

みんな立ち会いの上、その荷物を開いてみると、訴え出た本人の申し立てどおりであった。変更名札の本人は、あくまでも私の知らないことだと言い張る。いささか疑問がないわけでもなかったが、訴えた人に、あなたの荷物だということはつきりした。これを表沙汰にするとほかに影響のすることもおそれ、監視人を強化することで、本人をなだめ解決したことがある。私も、なるほど、どさくさまぎれにこんなやり方もあるんだなど、変に感心させられたものであった。

収容所での食事は、黒パンもあつたが、大体は大豆の多いお粥だったように思う。そして、収容所では毎夕食後、小一時間ほど学習会と称し、スターリン思想の啓発がなされていたし、いよいよ引揚船が来る前日、スターリンへの感謝文を朗読するように言われ、河合富士夫氏（蘭泊）に無理にお願いし、代表朗読してもらつた記憶がある。

引揚げの前日、広場に人の輪ができていたので、何だろうとのぞいてみると、日本人の夫と白系露人の妻とが、小学生らしい子供一人を挟み、梱包の寝具一つ

をお互いに譲り合っている光景であった。聞くと、この家族は引き揚げるべく、いったん収容所に入ったのだが、いよいよ明日出発というのに、ソ連官憲から白系露人の妻に残留を命ぜられ、残ることになったとのことである。生木を裂くということは正にこのことであろう。夫は「お前はここに残るんだし、樺太はこれから寒くなるから、この布団は持っていけ。北海道へ行けばなんとかなるさ」妻は、「私は何とかなる。あなたは裸で行くのだから持つて行って。子供は頼むね」こんなやり取りであった。周囲の者はみんなもらい泣きをしているのであった。この夫婦は豊原から来ていて、上の子は予科練に志願しており、下の子を連れての引揚げ途中の出来事であった。

引揚げの日の朝、ソ連側から、新生命社発行の部厚く上質製本の「ソ連革命史？」なるものを二十冊ほど持つてきて、これを日本に持ち帰って読むようにと置いていった。収容所の日本人責任者は、このことにつき内緒だがと前置きをして「この本は荷になって大変だと思うが、海へ捨ててもよいから、ともかく黙って

持つて行ってほしい。これを置き去りにされると、あとで入ってくる人に影響があつては困るので、何とか協力してほしい」と。更に、また「乗船後、いままでのうっ憤まぎれに大声で陸に向かつて、ソ連に罵声を浴びせた者が過去にあつて、ソ連官憲に不愉快なイメージを与えたことがある。気持ちにはわかつてても日本に帰るまで我慢してほしい」との注意を受けた。このことを引揚者に伝え協力を要請したのであった。

そして引揚者が港へ行くため舎前に集合したあと、私は各部屋に忘れものがないか点検して歩くと、やはり心配したとおり、この部厚い本は荷になるのは当然で、かなりの冊子がベッドの上に放置してあつたので、慌ててこれを回収し、物置の隅に持つていき、筵むしろをかぶせて何事もなかった顔をして戻つたのであった。

収容所の高台から望見すると、まさに四隻の引揚船が逐次、真岡港に入港しようとしており、いよいよ帰るとの思いが込みあげ、胸の高ぶりをおぼえるのであった。

まず集積してあつた荷物をトラックで港へ運ぶ一方、

老人や子供、病人、身障者もソ連側の配慮で、トラックに分乗し港へ。徒歩可能な者は地区別、かつ班別に体列を整え、副隊長、班長が引率して真岡市街を通り港に向かうのであった。

真岡の中心街通称三宅坂付近に差しかかると、突然「佐藤さん」と呼ぶ声が聞こえる。見るとソ連夫人が子供たちと手を振っているのである。この夫人は一時期、ソ連移住者にわが家の半分を提供したとき、住んでいたマガジン（商店）に勤めていた夫人と子供たちで、上の女の子は「リョーダ」といって、毎日のようにわが家に遊びに来たものであった。夫人の夫はドイツとの戦いで戦死されたとかで、未亡人であり子供二人と母の四人家族であった。隣り合つての生活だったから、誕生会とか祝いごとがある度に招かれる間柄で、瞬間、胸に込みあげるのをおぼえた。人種や政治思想が異なっている、人間の情に通ずるものがある。私もおもいきり「さよなら」と何回も叫び手を振ると、夫人やリョーダも街角を曲がり、見えなくなるまで手を振ってくれた。

港には、外部と遮断するための、外堀と乗船するときチェックするため、港湾側に内堀があり、引揚者はその空間に集められた。いったん全部が収容されると、それぞれの出入口には、ソ連警備員がいて、その外側へ出ることはできなかった。やがて使役を十人ほど出し、引揚船への荷物積み込みの荷役をするよう命ぜられ、屈強な若者を選び荷役を提供したのであった。その場合でも、内堀出入口の警備員にパスポートを見せ、本人の確認を怠ることがなかった。その人々は作業が終われば、そのまま乗船ができるからであった。

そうこうしているうちに、ある引揚者が見知らぬ二人を連れて来て、「実は脱走兵でパスポートがない。何とかみんなの中にまぎれ込ませて連れて行ってほしい。ほかに仲間が三人いる」とのことであった。何とかしたあげたい気持ちは山々であったが、乗船するときパスポートの記載人員をいちいちチェックされるはずで、とても不可能なことであった。これがばれた場合、引揚者全員に影響がないとは言いきれないからだ。私はとっさに次の助言をした。「正規のチェックの中

で連れていくことは不可能だ。幸い内堀が比較的に近い。監視の目をくぐって内堀をうまく越え、荷役の人々の中に紛れ込むより方法がないと思う。乗船することさえできれば、一緒に本国に連れて行ってあげたい。これはあくまでも君たちの判断で決めてほしい」と。やがて荷役が終えたので、待ちに待った乗船開始である。

私たちの船は「北鮮丸」である。班ごとに更に家族単位に念入りなチェックを受け、乗船のタラップを上った。やっと日本に帰れる。ホッとする反面、船が港を出るまでは不安でもあった。かねてみんなにも申し渡してあったこともあって、幸い不穏な叫び声をあげる者もなく、「スパシーボ・ダスウィダーニア」（アザリがとう・さよなら）」と感謝の声と、ソ連側見送人と交互に手を振り合つての別れであった。汽笛とともに船は静かに離岸していった。見送り人の姿も小さくなり、やがて樺太山脈も一つの帯となって伸びて見えるだけになっていった。樺太に生まれ育った私には、ただただ感無量で胸がこみあげるのであった。引揚者

の多くも感慨にふけっているのである。甲板の手摺りを離れようとしなかった。

引揚船「北鮮丸」は貨物船を改造したもののようだが、ただ広い船倉に千五百人の引揚者が、ぎっしりすし詰めの有様であった。船長は奇しくも私と同じ佐藤という人で、私も隊長、副隊長にはサロン室を提供してくれた。早速、乗船名簿を兼ねた引揚申告者の作成業務が行われたが、結果、乗船予定者より二人多いという。調べてみると、例の日本軍脱走兵五人のうち二人であった。成功を喜ぶ反面、乗船できなかった三人、どうなったのかと思うとかわいそうでならなかった。

波穏やかな航海で、宗谷海峡・利尻・礼文を遠くに眺め、日本の領域を通っている安心感に浸つての航海であった。

ところが、留萌沖を通る夕方ころから、海上はにわかのにけに変わっていった。台風であったのか、低気圧が圏内に入ったのか分からなかったが、だんだんと大しけの只中に突入していき、大型とは言えないこの船は前後左右に大きくローリングし、甲板は縦横に大

波が覆う状態となったのである。

船倉の引揚者は夕食時であつたが、食を取るところか酔いで、「先生を呼んでください」とあちらこちらから悲痛な叫び声や呻き声、果ては嘔吐の悪臭が船倉にこもる有様であつた。船には添乗医がいたのでこの旨を告げると、酔いなのでどうしようもないと言つて、白い錠剤を一袋渡してくれるだけであつた。隊長やほかの幹部連中もダウンしたようだが、幸い、私は酔いには強かつたので、酔いの薬や嘔吐用の缶を配つたり、嘔吐している人の背をさすつたりというふうに、こまねずみのように動き回されたのであつた。サロン室は上甲板にあつたので、揺れも大きく、室に戻つても椅子に掛けるどころか、放り出されて室中転げ回り、辛うじて椅子の足にしがみ付くのが精いっぱいという有様。加えて何かのはずみか食器棚の戸が開いてしまい、中の食器類が音たてて散乱し、その食器と一緒に床に滑り回っているといつても、過言ではなかつた。こうした船室の悪臭と嘔吐の中で、夕食をしているのは二、三人、女房もその一人で懸命に食べて

いるのには驚きであつた。それは生後四カ月の次男に乳を与えるためだという。母は強しの思いを深くしたのも事実であつた。この大しけの中で便宜をもよおす者も少なくなかつた。便所は船の両舷側に突き出して、仮設のものが二カ所設置してあつたが、この大波では利用することができず、甲板の入口で用を足すという有様であつた。この場合でも波に足をとられないように、内側からしつかりその人の手を支えてやることも必要であつた。もちろん甲板に用を足しても波がきれいに洗つてくれるのである。

こんな状態の中で、引揚者の疲弊は極限に達したことは言うまでもないことであつた。

積丹半島に差し掛かつていたが、隊長以下幹部で佐藤船長に嘆願した。乗客の体力も限界であり、この際、小樽港にでも寄港し、しけが落ち着くまで休養させてほしいと。船長も了解し小樽海運局に打電、小樽港に引き返すことになつた。私たちは早速乗客に対し、「しけが治まるまで小樽港に寄ることになつた。しばらくの間、頑張つてほしい」と激励した。やがて小樽

市街の明かりが、大きな波のうねりの向こうに浮き沈みして見えるようになった。小樽が近いぞ、とみんな生気を取り戻そうとしていた矢先、佐藤船長から「いま小樽海運局から連絡があり、間もなくしげが落ち着くので、そのまま函館へ航行するよう指示があった。みなさん疲れ切っているところ申し訳ないが、このまま函館へ向かう」とのことであった。一同がっかりしたことは言うまでもない。

船内から、「隊長さん、産気づいた人がおり、陣痛をもよおしているようなので、急ぎ産室へ連れて行ってほしい」「旦那はどうしたのか」「船酔いで寝込んでいる」やむを得ない。私が背負っていくよりほかはない。産室は最上甲板にあるという。船は相変わらずの大揺れである。「奥さん。私の首にしっかりしがみついてくださいよ。しばらくの間頑張ってね」彼女は呻きながらもうなずいて、私の首にしがみつくのであった。おなかに影響するので背負うわけにはいかず、横抱きにするよりほかはなかった。一步一步タラップを上って行った。途中で流産でもされたらどうしようと

案じつつのタラップであった。やっと産室にたどりつくことができホッとした。産室と言っても小さな室で菓が敷かれ、そこにござを並べた程度のものようであった。既に隣室には先客があり、赤ん坊の泣き声だけが大きく響いていた。産婆さんは引揚者の中にいたのであるうか。手際よく扱ってくれた。そして反対側の室をふとのぞくと驚いた。老人の一死体が置かれていた。死に去る者と生まれる出ざる者、一刻の中で人はこうも変化していくものなのであるうか。この死者も苦悩の中で一日も早い本土上陸を夢見つつ逝ったのであろうか。思わず合掌したのであった。

再び積丹半島を回るころには、だんだん波も治まり、函館港へ着いたのはほかの三隻に一昼夜おくれて、九月六日朝の入港であった。一同心身ともに疲労の極限であった。しかし、やっと祖国に着いたという安堵感の方が大きいのであった。間もなくバラックシップ（検査船）に移乗したが、一週間は上陸できないという。検査船では援護局の調査や諸手続がなされた。時には船員による楽団が、私たちを慰労してくれた。楽

器といつても、まともなのはアコードオンぐらいのもので、樽や金だらいてもあり、さまざまな寄せ集めの楽器であつたが、私たちの心を慰めてくれるには十分に楽しいものであつた。樺太でのソ連時代でもひそかに押入れなどでラジオを通して、日本をしのんだものであつたが、帰国して音楽に触れるのはまた格別な感激であつた。当時の流行歌は「リンゴの唄」「啼くな小鳩よ」「港が見える丘」「山小屋の灯」などがあつたようだが、殊に印象に強かつたのは田端義夫の「かえり船」であつた。

波の背の背に揺られて揺れて

月の潮路のかえり船……………

やっと故郷に帰り着いた安堵感が、この歌のイメージを通して、胸に響いてくるものがあつたからである。

一週間の検疫期間も終わり、函館引揚援護局から家族一人当たり千円の援護資金の支給も受け、九月十三日函館に上陸した。携行品の検査に加え、頭から真っ白になるまで、DDTの消毒には閉口したものであつた。検閲の中で、まさかソ連とは異なり、そんなにう

るさく調べることはないだろうと高をくくつていたら、ソ連から持ち帰つたソ連人と写した写真、それにソ連収容所で持ち帰るように言われ、私だけ函嚢に納め、忙しさの余り読むことも海中投棄することも忘れ、そのまま持ち帰ってしまった「ソ連革命史」など没収され、かつGHQと日系二世通訳により、ソ連における私の生活など詳しく調べられた挙げ句、私をソ連協力者とみなしたのか、「まだ調べる必要がある。残つてもらおう」というのである。家族は引揚げ先の秋田県に向かうべく既に函館港の長岡寮に行つていたので「私だけ残されるのは困る」と言うと、「いや、その家族も残るように手配している」と言う。やむなく、援護局差し回しの車に乗せられ、函館市の高台にある千代ヶ岱収容所に収容されることになつた。

この収容所は、元重砲連隊の兵舎跡だとかで、更に無縁故引揚者寮と、私のような未決勾留者の収容所とがあつたようである。そして、この収容所には既に、私と一緒に引揚者を世話してきた大隊長の桜井逸平氏や二、三人の知つた顔の人も入つてきており、驚かさ

れたのであった。やがてわが家族も「お父さん、どうなったの」と不安な表情を見せながら引き戻されてきた。「もうすこし調べるというのだが、心配するな」と。私の收容所の私たちの部屋は六畳ぐらいあつたらうか。七人家族がどうやら眠れるぐらいのものものようであつた。寝具は毛布を支給され、食事はほとんど唐黍とうもろこしのようであつた。

あるとき、頭髮も茫々となり我慢できなくなつたので、收容所の外の理髪に行かせてもらった。理髪料は八十円だという。驚いた。樺太時代はたしか五円程度だつたような記憶があり、はじめて本国の物価に接し、これほどインフレになっているとは思わなかつた。仙人になつた思いもする反面、援護局から支給の千円はいつまで持つのであろうか、不安を募らせたことも事実であつた。收容所に戻ると娯楽室で映画があるという。懐かしい「エノケン」の映画であつた。そのほかの日中は漠然と窓外を見ている毎日であつた。そのうち知つた顔の人が一人、二人と退所していく姿を見て、しびれを切らし事務室に赴き、「調べるものがあれば

早く調べて帰してほしい」と訴えたことも一度だけではなかつた。それにもまして不愉快な思いをしたことは、就寝前に職員が黙ってドアを開けては、無表情な顔で、部屋の人数を顎で数えてボタンとドアを閉めていく仕草であつた。私たち家族は犯罪者扱いにされ耐え難い思いをしたものであつた。そのうち三歳の長男が栄養失調にでもなつたのであろうか、下痢症状を訴える毎日であつた。

九月二十日の夕方事務室へ呼ばれ、「一応帰つてもらうが、いつ呼び出されても対応できるように、所在だけを常に明らかにしておくようにしてほしい」と言われ、九月二十一日朝、函館港までわが一行を送つてくれ、はじめて解放されたという解放感に浸ることができたのであつた。

早速、秋田県能代市の妻の実家へ打電し、青函連絡船を乗り継ぎ、青森駅から奥羽本線に乗つたところ、その車中で私たちの前に一人の若い男が、骨箱と乳幼児を抱いて放心状態で座っていた。そして時々乳幼児が乳を求めて泣き叫ぶのであつた。尋ねて見ると、や

はり私たちと同じ樺太の引揚者で、奥さんはこの春出産したが、産後が悪く死亡し、残された乳飲み子と妻の遺骨を抱いて、新潟へ引き揚げるのだとのことであった。私の妻は、幸い次男に与えても、なお乳量が豊富であつたことから、その子を抱き寄せ母乳を与えたところ、むさぼるように吸つていた。そして、満ち足りると再び父親の懷に抱かれ、すやすやと眠つていた。東能代駅で下車するため、その父子と別れたが新潟までの車中、その子の授乳はどうするのか、無事帰られることを祈つたものであつた。東能代駅には妻の母が迎えにきてくれ、私たち家族の無事帰還を喜び、そして丸裸で乞食同然の私ども一家を温かく迎えてくれたのであつた。

【執筆者の横顔】

佐藤晴夫氏の先祖は秋田県出身である。父親は若くして樺太に渡つたので、晴夫氏は、大正七年六月の本斗町で生まれた。

父親は五十歳の若さで亡くなつたので、旧制中学を

退学し、家計維持のため働いていたが、昭和十四年五月、現役兵として秋田歩兵連隊に入隊したが疾病のため、十六年帰郷した。その年の十一月蘭泊村役場に奉職、庶務主任として勤務中、二十年八月終戦により、ソ連進駐後も村役場にあつて、住民の不安除去に努め、ソ連政局の地方機関として設置された蘭泊民政署と日本住民とのパイプ役として立ち働いた。

二十二年八月、佐藤一家は秋田へ引揚げとなる。住み慣れたわが家と蘭泊村が遠のいていくにしたがい、この地で亡くなつた父親の分骨を抱いて去るのは断腸の思いであつた。幼年、少年時代から、この地で育まれてきたことの数々が走馬灯のごとくよみがえつた。

真岡町の収容所で大勢の引揚者の代表者となり、蘭泊村の引揚者、二百八十余人の引率隊長として、佐藤氏は混雑な問題が次々と出てくるのを手際よくさばいて治める、東奔西走したのである。

食料は無くなる。病人は出る。親を見失つて泣く子供。死者も出る。脱走兵がきて乗船をせまるなどなど。

引揚船で函館港に九月十三日無事上陸。一週間、函

館収容所に勾留されるが、九月二十日解放され、能代市に引き揚げた。佐藤一家を待ちわびる実家では、温かく迎えてくれたのである。

清廉にして、温情豊か、老いてなお文学青年の気質に富む佐藤氏は、ソ連の中尉から、またサハリンにこいよ、と固い握手を交わされて別れを惜しまれた人格高潔な人物である。

(笹引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)